

原点回帰

都市鳥研究会顧問 唐沢 孝一

先が見通せなくなった時には、出発点に戻るのがよさそうだ。座標軸の原点に戻ってみると現在の立ち位置がよく分かり、進むべき方向が見えてくる。個人でも組織でも、壁にぶつかり分岐点に立たされたときは、最も大切なものは何か、目指してきた理想は何かを振り返り、原点に立って考えてみる。これを「原点回帰法」という。と言っても、勝手にそうネーミングしてみたにすぎないのだが……。

数年前に古稀を迎えたとき、自分の原点を振り返ってみた。それは生まれ育った群馬の山村であり、野鳥との出会いであった。戸籍によれば、群馬と長野の県境に近い標高1066mの硫黄鉱山で出生、中学を卒業するまで山村で育った。少年時代を過ごした昭和20～30年代は、雪の山野でホオジロやノウサギを捕獲するのが楽しみの一つだった。が、「ある出来事」を体験してより、鳥の捕獲は止め、鳥の生態観察や自然観察の道を歩むことになった。

昭和20～30年代の日本の自然は、戦時中の森林伐採により荒廃しきっていた。山は保水力を失い、キャサリーン台風やキティー台風などの大洪水に見舞われた。いつの時代も、日本の自然保護の原点は「治山治水」にある。当時の日本を統治していたのはGHQであり、日本の野生鳥獣の保護管理を担当していたオースチン博士の提言により、欧米流の自然保護策が導入された。その一つがTree day(日本では全国植樹祭)であり、もう一つがBird day(後にBird week)である。国土を守るために山野を緑化し、その樹木を守るための野鳥の役割を重視したのだ。

「樹木と鳥が国土を守る」というのが、オースチン流の哲学であった。警察力の及ぶにくい山野にあっては、「法律だけでは自然は守れない」「心から鳥を愛する子どもを育てることが何よりも重要」という理念が根底にあった。文部省や林野庁は、児童生徒の野鳥保護意識を高めるために1951年から「巣箱を利用した野鳥の観察コンクール」



を実施した。「ある出来事」と記したのは、恩師である理科の先生の勧めにより、中学生だった私はコンクールに応募すべく裏山に巣箱をかけてシジュウカラの繁殖を観察し、鳥の魅力にとりつかれてしまった。私と鳥を結びつけた原点はここにあり、その後の人生をも決定づけたように思う。「教育」が一人の少年の生き方を変えたのである。

一方、1934(昭和9)年創立の「日本野鳥の会」は、創始者である中西悟堂先生を抜きには語れまい。野鳥研究家にして文学者・宗教家であり、幅広い交友関係が活動を支えた。カスミ網禁止の法制化、空気銃の規制、サンクチュアリー設置など、社会全体に広く訴えつつ会長みずから保護活動の先頭に立った。また、日本には鳥関係の組織がいくつもある。学術研究を主軸とした日本鳥学会(1912年創立)、愛鳥教育や自然教育に重きをおいた日本鳥類保護連盟(1947年設立)、膨大な標本や文献資料を所蔵し、研究や保護活動を展開する山階鳥類研究所(1942年設立)等々である。どの組織も発足時に高く掲げた独自の理念があり、創設者らの熱い思いがある。こうした鳥関係の団体と連携しつつ、鳥類保護の中核的な活動を展開してきたのが日本野鳥の会とその地方組織(支部)であった。2020年東京オリンピックのカヌー会場の候補地を変更させた「日本野鳥の会東京」の活動は、久々に見せた「原点回帰」だったように思うのだが、どうであろうか。